広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	元良親王と修子内親王という奇妙な夫婦 ： 『元良親王集』からの検討
Author(s)	顧, 宇豪
Citation	国文学攷 , 248 : 29 - 40
Issue Date	2020-12-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051479
Right	Copyright (c) 2020 by Author
Relation	

元良親王と修子内親王という奇妙な夫婦

――『元良親王集』からの検討――

顧　宇　豪

はじめに

修子内親王は元良親王の妻である。しかし、唯一の妻ではない。『尊卑分脈』[1]に、修子内親王は元良親王の七人の息子[2]（佐材王・佐時王・佐頼王・佐兼王・源佐芸・源佐平・源佐親）の内の佐頼王の母として記録されている。修子内親王以外には、佐時王の母神祇伯藤原邦隆女と源佐芸の母誨子内親王が記録されている。残り四人の母は不明である。『元良親王集』に言及されたのは修子内親王のみである。兵部卿になった元良親王のために修子内親王が四十の賀を設けたことは、『日本紀略』[3]に記録され、『後撰集』[4]と『貫之集』[5]にも関連の賀歌が収録されている。『元良親王集』六十七番歌詞書にも「北の方宮」という記述がある。『元良親王集全注釈』[6]（略称『全注釈』）は、修子内親王が元良親王の正妻として認識されていたのだと指摘する。

『元良親王集』の六十番歌から七十一番歌の十二首に及ぶ歌群は、修子内親王の元良親王との初婚から薨去までの推移を展開している。『元良親王集注釈』[7]（略称『注釈』）及び『全注釈』では、高貴な親王という先入観に基づき、元良親王と修子内親王の夫婦関係を理想化する傾向がある。しかし、筆者の考証によれば、この二人の親王は落ちぶれた皇親であり、その夫婦関係は睦まじくはなかったが、長期間持続したことが分かった。そこで、この両親王の夫婦生活の実態及び現実の人物像を改めて検討したいと思う。

一、元良親王という夫

『元良親王集』において、修子内親王は六十番歌に初登場する。

かく定めなく憧れ給ふけれど、いと心ありてをかしうおはする宮と聞き給ひて、大夫の宮す所の御腹の女八宮にあはせ奉りて朝に、男宮

60　ほどもなく帰る朝の唐衣心まどひにいかできつらん

六十番歌の詞書から、修子内親王の母の大輔の御息所が元良親王を婿取ることを決めたことが分かる。『全注釈』[8]によれば、大輔の御息所[9]は醍醐天皇更衣の満子女王である。詞書によれば、満子女王が聞いたその頃の世間の元良親王に対する評判は「かく定めなく憧れ給ふけれど、いと心ありてをかしうおはする宮」となっている。「かく定めなく憧れ」について諸説[10]あるが、筆者は、六十番歌前の歌群で閑院三姉妹と次から次へと破局し、悲しませた内容を直接に承けて、元良親王の飽きっぽく気紛れな恋愛気質を指すと考える。そのような「定めなく憧れ」る元良親王だが、満子女王は「いと心ありてをかしうおはする宮」という評価に心を引かれ、娘との結婚を決めた。こうした元良親王と女八宮修子内親王の結婚は、自由恋愛によるものではなく、女性方の母が主導した結婚に属する。『伊勢物語』[11]第十段にもそのような事例が見られる。

修子内親王の生年について、直接的な記録はないが、醍醐天皇第七皇女婉子内親王と第九皇女敏子内親王の生年[12]を参考にし、延喜四年（九〇四）～延喜六年（九〇六）という期間に推定する。

結婚の時期に関しては、六十二番歌が満子女王の詠歌なので、満子女王在世中のことだと考えられる。『平安時代史事典』[13]によれば、満子女王の没年は、『貞信公記抄』[14]延喜二十年六月条に「廿七日、大輔更衣労中頓滅」により、延喜二十年（九二〇）とある。延喜二十年の時点で、修子内親王は十五～十七歳だと推定され、既に結婚しているので、相当若い齢で元良親王と結婚したと考えられる。恐らく裳着の直後であろう。その頃の元良親王の年齢は三十一歳で、修子内親王とは親子ほどの年の差があると言える。

結婚の経緯について、『全注釈』[16]は

当時、内親王は生涯独身を通すことが常だったが、しっかりとした後見のいない内親王の将来は、心配の種であったようだ。修子内親王の父醍醐天皇（八八五～九三〇）は、親代わりとして、元良親王を結婚相手に選んだのではなかっただろうか。

『源氏物語』の中で光源氏は、母女御と死別した女三宮の後見について、「すべて女の御ためには、さまざまことの御後見とすべきものは、なほさるべき筋に契りをかはし、え避らぬことにはぐくみきこゆる御まもりめはべるなむ、うしろやすかるべきことにはべる」（若菜上巻）と朱雀院に話している。内親王に対する実のある後見を望むのならば、しかるべき男性と結婚させるべきだ、というのである。

次の62番歌の詞書から、二人の結婚は修子内親王の母満子女王が在世中のことと考えられるが、母親は更衣であり、母方の後見は期待できない。また、無品である修子内親王は、将来の生活や境遇が案じられる立場にあった。元良親王との結婚は、修子内親王の後見をさせるためであったのだろう。

と述べ、修子内親王の後見を任せるために、醍醐天皇が元良親王と結婚させたと指摘している。それに同意するが、醍醐天皇が『源氏物語』の朱雀院のように積極的に関与しているという意見に対しては賛同しかねる。出家を決意した朱雀院と違い、延喜二十年頃の醍醐天皇は壮年期にあり、修子内親王の後見を担う客観的条件がないわけではない。ただ醍醐天皇は大規模の後宮を抱えており、内親王だけでも十数人存在するので、更衣である満子女王腹の第八皇女修子内親王に対しては、特に関心がなかったであろう。そのため、修子内親王の婚姻は満子女王一人で主導したものと考えられる。

満子女王が元良親王を見込んだ理由、「いと心ありてをかしうおはする宮」ということについて、『全注釈』は続いて、

ただ、元良親王は「さだめなくあくが」る性質であり、後見役として不安がなかったわけではないだろう。事実、後出の詞書からは、修子内親王との結婚後も、多くの女性たちと恋愛を続ける元良親王の姿がうかがわれる。しかし、「いとここころありてをかしうおはする」ことを重視したのかもしれない。

『源氏物語』でも、朱雀院が女三宮の結婚相手に光源氏を選ぶ際、光源氏の「旧りせぬあだけこそは、いとうしろめたけれ」（若菜上巻）と思っている。しかし、「ほどほどにつけて、人の際々おぼしわきまへつつ、ありがたき御心ざまにものしたまふ」（同）ところがあり、「さりとももの心得て、うしろやすき方はこよなかりなむを、方々にあまたものせらるべき人々を知るべきにもあらずかし」（同）と考えて、決めている。元良親王も、周りの人々から光源氏と同じように見られており、それが二人の結婚の決め手になったのではないか。

とあるように、元良親王を光源氏に見立てるが、なお同意しがたい。女三宮との縁談話は「若菜上」の内容であり、その時の光源氏は六条院という准太上天皇の地位に立ち、息子の夕霧でさえ中納言に昇っている。それに対して、その時の元良親王は「陽成院一宮」と呼ばれる無官の親王[17]であり、世間に光源氏のように見られるはずがない。また、「かく定めなく憧れ」とあるように飽きっぽく気まぐれな恋愛気質で、光源氏のような他人に対する深い気配りとは無縁と言えよう。満子女王は元良親王が光源氏のような婿だとは思わないであろう。

元良親王の婿としての状況に関して、修子内親王同腹の妹、醍醐第十一皇女の普子内親王の結婚相手、源清平という人の状況を参考にしたい。『系図纂要』によれば、普子内親王は延喜十年（九一〇）に生まれて、満子女王が在世中に結婚したとすれば、延喜二十年（九二〇）に十一歳で結婚したと推測する。それに対し、光孝天皇皇子是忠親王の二男である源清平は、『公卿補任』[18]にある天慶八年（九四五）六十九歳卒という記録によれば、延喜二十年の時点で既に四十四歳に達していた。又、『公卿補任』によれば、その時の源

清平は延喜十七年（九一七）から河内守に就任していた。このような老齢の国司が修子内親王同腹の妹の夫であれば、元良親王も大して変わらず、客観的には同じく落魄の皇族の類であろう。

二、結婚の原因

さて、内親王と言えば高貴な印象があるが、少とも醍醐天皇の内親王の状況を見る限り、決して全員優遇されているとは言えない。諸資料を整理すれば以下のようになる。

醍醐天皇内親王一覧表

順列	名	母	位階	配偶者／斎宮・斎院
一	勧子内親王	為子内親王	四品	
二	宣子内親王	源封子		斎院
三	恭子内親王	藤原鮮子		斎院
四	慶子内親王	源和子	無品	敦固親王
五	勤子内親王	源周子	四品	藤原師輔
六	郁子内親王	源周子	無品	
七	婉子内親王	藤原鮮子	三品	斎院
八	修子内親王	満子女王	無品	元良親王
九	敏子内親王	藤原鮮子	無品	
十	雅子内親王	源周子	四品	斎宮／藤原師輔
十一	普子内親王	満子女王	無品	源清平／藤原俊連
十二	靖子内親王	源封子		藤原師氏
十三	韶子内親王	源和子		斎院／源清蔭／橘惟風
十四	康子内親王	藤原穩子	一品	藤原師輔
十五	斉子内親王	源和子		斎宮
十六	英子内親王	藤原淑姫		斎宮

以上のように、保明親王・朱雀天皇・村上天皇の妹、康子内親王以外に、特に優遇された内親王はいなかった。しかも『拾芥抄』[19]によれば、「内親王封戸半減、女位田三分の一也」という原則があるようで、内親王の苦境が明白である。十一皇女普子内親王と十三皇女韶子内親王には、夫が二人存在するが、前の夫が死去した後に改嫁したのであろう。しかも、そのような改嫁もかなり急いで行ったようで、例えば、普子内親王の薨去は天暦元年（九四七）で、夫の参議源清平が死去した天慶八年（九四五）から僅か二年しかないが、すぐさま和泉守藤原俊連に改嫁したと考えられる。また、韶子内親王も源清蔭[20]が薨去した天暦四年（九五〇）の後、河内守橘惟風に改嫁し、天元三年（九八〇）まで存命した。生活の保障のために、改嫁もせざるを得ない。しかも皇族の公卿から受領に改嫁するという不恰好な形となっている。これら醍醐天皇の内親王の事情を参考にすれば、修子内親王と元良親王の結婚の背景には、生々しい現実的な苦況があると考える。

婚としての元良親王の客観的な条件は決して理想的とは言えない。しかも「かく定めなく憧れ」の癖を持つ飽きっぽくて気紛れな男であった。しかし、「いと心ありてをかしうおはする」というのは、決定的な条件となった。それを理解するには、『元良親王集』にある満子女王の歌が重要な手掛りとなる。

母宮す所の御もとに、御衣のほころび縫ひにたてまつれ給へりければ、宮す所

62　返しける人唐衣と思ふには常ならぬ香ぞ添ひてめでたき

当該歌において、満子女王が元良親王の服の香りを褒め称えた。身の香りについては、『源氏物語』[21]「匂兵部卿」の中の薫と匂兵部卿の話が有名で、特に匂兵部卿が薫に負けないように、種々の努力を尽くしたエピソードが印象に残る。匂兵部卿の香りに対する狂熱ぶりから、香りは自身のファッションセンスや品位などを示すのに重要な役割を持つことが分かる。従って、尋常ならぬ香りを纏う元良親王は、粋な風流人である。満子女王がその香りを根拠として、「いと心ありてをかしうおはする宮」という世間の評価を検証した。満子女王は醍醐天皇の更衣として、豊富な宮仕えの経験があり、あれ程大規模な醍醐後宮において寵愛を蒙ったから、余程の風情を知る人だと考えられ、香りに関しても詳しいのであろう。

しかし、修子内親王は恐らく母のような風流を知る人ではない。修子内親王は幼いので、教養も不足し、父からも教育を受けておらず、母も忙しく、「労中頓滅」までしたので、娘を教育する余裕はなかったのであろう。満子女王には、風流な元良親王を婿取りして、娘の教育を任せるという計算があったかもしれない。

六十二番歌の場所に注目したい。当時、男は関係を持つ女の所に衣服を預ける習慣があった。例えば『元良親王集』に、

女の持つたる物を取りてをはしにければ、つとめて、

女

18　人恋ふるよるの衣にあらずともされば返して我に見せなんとある、元良親王が女に預けた衣服を取りに行った際に、女が関係を挽回しようとするエピソードである。修子内親王と結婚した後、元良親王の衣服を修子内親王の所に預けたと考えられる。そうすると、岳母の満子女王に衣服の修繕を依頼したのは、満子女王が修子内親王と同居しているからであろう。六十六番歌詞書によれば、狛野の院は修子内親王らの居所で、現在の京都府と奈良県の境にある上狛地域に相当する田舎である。

『伊勢物語』第五十八段には、長岡の田舎で田刈りをする「宮ばら」が完全に田舎娘として扱われる。『新編日本古典文学全集』[22]によれば、『愚管抄』に、「桓武天皇の皇女あまた長岡の京にすみ給ふを云々」とあり、業平の母伊都内親王も桓武天皇皇女である。このように、末流の皇族が田舎に住む事例は確認できる。狛野の院は満子女王の屋敷で、修子内親王の生まれ育った場所だと思われ、修子内親王は実は田舎育ちの娘だと考えられる。

また、『伊勢物語』第五十八段には、都人の業平が「心つきて色好みなる男」と思われる。ここの「心つき」は、業平が長岡の女たちを「鬼」と誘るという心ないことを考えると、『全注釈』が言う配慮深いという意味ではなく、むしろ、田舎娘の視点から見たシティーボーイとしての風流な気質だと考える。同じく「いと心ありてをかしうおはする宮」も、元良親王が風流を知るシティーボーイであることを指すであろう。満子女王が田舎娘の修子内親王を元良

親王に託すのは、上流社会の知識や教養を薫陶してもらうという期待を込めたのであろう。

また、満子女王腹の修子内親王と普子内親王の夫、元良親王と源清平が共に年長の皇族であることから、満子女王は特に皇族の血筋にこだわっていることが分かる。満子女王自身も皇族なので、皇族の血筋の価値を重んじていたのであろう。『大和物語』[23]第七十六段に、桂宮とも同居している母の十世女王が、清和天皇皇子源長猷の子の嘉種が通ってくると知って、家門を鎖したエピソードが見られる。身分の低い嘉種と娘の恋愛を強く阻止しようとしたのであろう。内親王を相手にするには、やはり相応の高貴な身分が望まれる。『令義解』[24]継嗣令の王娶親王条「凡王娶親王、臣娶五世王者聴、唯五世王、不得娶親王」によれば、内親王の結婚相手が原則的に五世以内の皇族に限られている。中村みどり氏[25]によると、内親王の降嫁は、勤子・雅子・康子三人の内親王が師輔に降嫁することを節目に正常化していくので、それ以前ではごくまれである。従って、修子内親王の結婚に関しては、まだ王娶親王条の伝統を守っていると考える。ただ、満子女王が、修子内親王と同年代の若年の皇族、例えば延喜十七（九一七）年に元服した元良親王の異母弟の元長・元利両親王[26]を婿に選ばなかった理由は、やはり後見役に相応しい貫禄を求めたからであろう。上流社会の知識や教養を教育する役割も、年長の皇族だからこそ担当できよう。

いずれにせよ、婿として元良親王は恋愛の面では浮気性という欠陥を持っているが、風流を知る年長の皇族だという条件が満子女王に重視されたのであろう。満子女王は現実主義者の一面を持っているが、天皇家の血統を重視するなどの伝統的な価値観も捨てなかった。その意味で、修子内親王と元良親王の結婚は、当時の婚姻に関する価値観を反映している。

三、結婚生活での葛藤

修子内親王と元良親王の婚姻関係は、修子内親王が承平三年（九三三）に薨去[27]するまで持続した。元良親王は、六十番歌詞書で「かく定めなく憧れ」と批評されたが、修子内親王を置き去りにはしなかった。

修子内親王は元良親王の好みではない。前述のように、結婚当初の修子内親王は田舎育ちの若い娘であると考えられる。そのため、元良親王は最初の頃から修子内親王が気に入らず、相変わらず興味のある女性に通っていたのであろう。六十番歌のように、元良親王は初夜の後、適当な後朝の歌を送ったが、その仮初めの気持ちを修子内親王に見抜かれ、六十一番歌が返された。

返し

61　時の間に帰り行くらん唐衣心深くや色の染まぬと

以上のように、元良親王は修子内親王に通った初夜の後、すぐさ

ま帰った。また、六十四番歌

同じ御中にまだしくおはしける時、この宮におはし始めて又の日、京極の宮す所のお許に奉り給ひける

64　いとどしく濡れこそまされ唐衣逢坂の関道まどひして

によれば、元良親王は、同時に京極御息所と交際しはじめており、修子内親王との初夜の後、京極御息所に歌を送った。つまり、元良親王が急いで帰るのは、京極御息所の所に赴くためである。そこからは、元良親王が田舎娘の修子内親王を気に入らず、やはり都の名媛京極御息所を好むといった真意が窺える。

六十一番歌では、修子内親王が元良親王の早帰りに対して、自分に対する思いが浅いと責めていることから、妻としての独占欲が早くも表れたと考える。又、六十三番歌

かくて住み奉り給ふけれど、他ありきを知給ふければ、つらげなる気色におはしけれど、見知らぬやうにていで給ふければ、女宮

63　ねにたかく泣きぞしぬべき空蟬のわが身からなる憂き世と思へば

と宣ひければ、「あはれ、あはれ」とて、とどまり給ふにけり

とあるように、元良親王が自分以外の女性の所にも通っていることを知って、修子内親王は辛い顔をしたという。平安時代の自由恋愛がある意味では常識で、元良親王の年齢も三十歳近いと考えるので、既に何人かの女性がいてもおかしくないはずである。むしろ六十番歌詞書にあるように、満子女王は元良親王の浮気気質を承知した上で娘と結婚させたのである。しかし、六十三番歌では、修子内親王が初めて元良親王の浮気性を知ったかのように嘆いている。恐らく、元良親王の浮気性が母に隠蔽されたまま、修子内親王は元良親王と結婚したと考える。

『元良親王集』に見られる修子内親王の歌は六十一・六十三番の二首のみであるが、いずれもありのままの感情を表現する歌である。六十一番歌では、元良親王の仮初めの気持ちを見抜いて、自分の不満を直接表した。又、六十三番歌では、夫の浮気問題に悩む自分を無視する夫に対して、「わが身から」と自分を虚しい空蟬に見立てて、不幸な夫婦関係と辛い世の中のことを嘆く。注目したいのは、修子内親王の歌は、あくまで自分の気持ちを表しているだけで、元良親王に対する配慮は全くないという点である。それに対して、『元良親王集』の他の女性の歌は、多少なりとも感情を婉曲に表現する傾向があり、元良親王に対する配慮が見られる。代表的なのは、次の京極御息所の歌である。

宮す所の御返し

65　まことにや濡れけりやとて唐衣ここに来たらば問ひて絞らむ

先々通はせ給ひける御文ども、今は返し奉れ給ふとて、
宮す所

66　破ればをし破らねば人に見えぬべしなくなくもなほ返すまされり

元良親王の嘘を責めるのも「まことにや」と問を投げ掛け、絶縁を申し入れた際にも「なくなく」と未練が残るように表す。以上の歌は実に婉曲に表現されており、京極御息所の元良親王に対する心遣いが垣間見え、平安女性としての教養と気品を備えている。さすが宇多院の寵愛を独占した当代きっての名媛の器量がある。

その一方、修子内親王は、初々しい少女と上品な内親王のイメージと違い、不満を率直に投げ付けるので、平安上流社会の観点から見れば、聊か粗野かもしれない。修子内親王は、元良親王を自分独占の夫として、本能的に捉えたのであろう。

六十三番歌の修子内親王のヒステリックな嘆きを聞いて、元良親王は「あはれ、あはれ」と言って、本来別の女の所に向かうはずの足を留めた。ここの「あはれ」について、『伊勢物語』の第十四段に「歌さへぞひなびたりける。さすがにあはれとや思ひけむ、いきて寝にけり」とあり、業平の陸奥の女に対する惻隠の情が見える。田舎娘の修子内親王に対して、元良親王にも同じ感情が湧いたからであろう。

その一方、修子内親王は妻として、元良親王を実際に束縛したと思う。例えば、

北の方宮にむしことて侍ひける、召しければ、庚申に起き給ふてけるを、男宮、狛野の院におはしましけるに、むしこが奉りける

67　数ならぬ身はただにだに思ほえでいかにせよとかながめらるらむ

宮の御返し

68　つれづれとながむと言ふなる人よりも他の時雨はおとらざりけり

とあるように、修子内親王が庚申の日に徹夜していたので、狛野の院に居た元良親王がその侍女のむしこと逢えないという。元良親王は修子内親王の行事に参加し、そのため色好みの活動も制限され、「数ならぬ身」のむしこを相手にした。

地図から判断するに狛野の院と都は直線距離でも五十キロ程離れているので、元良親王の本邸にするには辺鄙すぎるので、都にも屋敷があったと考えられる。しかし、そういう通常の場合だと、元良親王は昔のままで都の女性と恋愛するはずで、わざわざ狛野の院の侍女のむしこと通じる必要がなくなる。元良親王が偶にしか狛野の院に来ない場合、さぞや修子内親王に密着されるから、むしこと通じる隙もない。従って、元良親王とむしこの恋愛が成立するには、元良親王が狛野の院に長期間滞在し、かつ修子内親王との間に隙が

あいたという二つの条件を満たす必要がある。以上のことを考慮すれば、元良親王の活動範囲が修子内親王によって束縛されたと推測する。

共に零落の親王で、強い個性を持つこの二人が夫婦になったのは、当時の世間から見れば何という不思議な因縁であろう。しかし、こうした相生相克の関係があったからこそ、元良親王と修子内親王の夫婦関係はそこまで長く続いたのであろう。

さらに、修子内親王という妻は、元良親王を多少束縛したと考えるが、その夫婦関係をきっかけに、朝廷との関係が一層親密になり、やがて四十歳近くになって兵部卿の官職が授けられることにも関係しているかもしれない。いずれにせよ、修子内親王との結婚は、元良親王の人生にとって実に重大な意義を持っていると言えよう。

四、修子内親王薨去後

前節で考察したように、修子内親王は元良親王にとっては重要な存在である。修子内親王に対する深い思いが薨去後の哀傷歌から一層顕著に見られる。

修子内親王が薨去したのは承平三年（九三三）二月五日で、二十八～三十歳の頃だと推測できる。その際に元良親王が詠んだ哀傷歌は

女宮失せ給ひにければ、男宮

69　岸にこそよよをばへしか泉川今年袂をひたしつるかな

である。「よよをばへし」からは、修子内親王と長く一緒に暮してきたことが分かる。「泉川」というのは木津川の古称であり、狛野の院の所在地と推測する現在の上狛辺りを東・南・西三方向から囲んでいる。二人の居所である狛野の院から連想しやすい地名である。

翌年の承平四年（九三四）の十月の作に

又の年の十月に、伊衡の中将参りたる御みきのついでに

70　神無月時雨はなにぞいにしへを思ひ出づれば乾く間もなし

宮

71　いにしへを思ひにあへぬ唐衣濡るるほどなく乾きこそすれ

とあるのは、伊衡が修子内親王薨去の翌年の十月に御酒を献上した時の贈答歌である。「いにしへ」とは、修子内親王が元良親王のために設けた四十の賀のことであろう。その際に、伊衡も列席しており、『後撰集』慶賀・一三六八に、

女八のみこ元良のみこのために四十賀し侍けるに、きくの花をかざしにをりて　藤原伊衡朝臣

よろづ世の霜にもかれぬ白菊をうしろやすくもかざしつるかな

とあるように、賀歌を献上したことがある。元良親王の返歌からは、この四十の賀のことをよく覚えていることが分かる。この四十の賀

は修子内親王との関係において、重大な意義を持つイベントだと考えられる。しかし、『元良親王集』において、この四十の賀について明白に言及した箇所は全くない。

伊衡がただ私人としての関係で元良親王の所に参上したとは考えにくい。伊衡は醍醐天皇の近臣であり、『公卿補任』によれば、同年の承平四年十二月二十一日に五十九歳で参議に昇進するので、朝廷と親密な関係を持っていたと考えられる。四十の賀の時に賀歌を献上したように、朝廷の指示をうけて修子内親王を亡くした元良親王への慰問を行ったのであろう。

しかし、修子内親王を哀悼する歌を詠んだ伊衡に対して、元良親王の歌は哀傷の感情に焦点を当てず、己の強い愛情を強調しており、哀傷歌というよりも、むしろ恋歌だと考えられる。これについて、『注釈』[28]は、

伊衡歌とは逆の発想において詠んでおり、《思ひ》、すなわち、熱い愛情にのみ生きる色好みの元良親王らしい発想による哀傷歌であり、寂滅への悲哀をあえて拒むところ、極めてユニークである。みまかられてしまった今、修子内親王に対する愛は、かえって熱く燃える。この哀傷歌をもって、本家集の第一部をおわる。

と述べており、元良親王が独特な発想で修子内親王への愛情を表現していると指摘している。

しかし、六十九番歌のような一般的な発想の哀傷歌もあり、また七十一番歌は元良親王らしい独特な哀傷歌と捉えるよりも、実は色好みのことを言っていると考える方がよいのではないか。七十一番の「いにしへを思ひ」という表現は、勿論修子内親王に対する追悼の気持ちがあるが、「思ひにあへぬ」という表現は、あくまで元良親王自身の恋心が、妻を失った現在もなお燃え盛っていると言っているので、つまり、妻を亡くした今も恋心が熱くて、新しい妻が欲しいことを暗示していると推測する。前述したように、宇多第七皇女誨子内親王も元良親王の妻であり、内親王の没年月日の天慶六年十二月十四日[29]を考えると、修子内親王の後に元良親王と結婚したと想定できる。修子内親王という枷が無くなったので、元良親王は色好みの道に復帰を図ろうとしたのだろうか。それは、『元良親王集』の冒頭詞書にある「いみじき色好み」という人物像と一貫しており、実に元良親王らしいところでもある。

まとめ

元良親王は希代の色好みであり、官職にもつかない陽成院の皇子である。修子内親王は狛野の院に住む田舎育ちの皇女である。理想的な皇子皇女と違い、この二人の親王は恵まれず、高貴な身分の裏には現実的な苦衷を抱えており、その結婚も、厳しい現実に対して、親王の体面を保つための一種の妥協であったかもしれない。それぞ

れに問題のある両親王の夫婦関係は穏やかだったとは言えないが、結果的には持続したので、夫婦間の愛情が証明された。『伊勢物語』における夫婦関係は儚く、特に妻に関しては、紀有常の妻や橘の香の妻などつれない妻が多い。それに対して、修子内親王は風流も知らぬ田舎娘かもしれないが、妻としてこの夫婦関係を守り抜いた。そして、色好みの元良親王も修子内親王を見捨てなかった。『元良親王集』にある数々の好色譚の中で特別に引き立てられたこの夫婦譚には、両親王の現実的な人間味が感じられ、独特な面白みもあって、刮目に値する。

〔付記〕

本稿において、『元良親王集』の本文は『冷泉家時雨亭叢書64 平安私家集　十二』（朝日新聞出版、二〇〇八年）所収の冷泉家時雨亭文庫本を底本とし、適宜校訂を加えたものである。底本にない和歌を、『龍谷大学善本叢書十八　四十人集　二』（思文閣出版、一九九八年）所収の龍谷大学写字台文庫四十人集本により補った。各歌の歌番号は、便宜上、『新編国歌大観』の歌番号と一致させた。

本稿において引用した和歌は、特に断らない場合は『新編国歌大観』により、それ以外は、その底本の名を明記した。『後撰和歌集』の歌番号は天福本の一四二五首に準ずる。

人物の年齢に関しては、全て数え歳となる。

〔注〕

1 『新訂増補国史大系　第六十巻上　尊卑分脈　第三篇』（吉川弘文館、一九六一年）。以下同じ。

2 娘の記録なし。『陽成院一宮姫君歌合』によれば、娘もいた。

3 『新訂増補国史大系　第十一巻　日本紀略後篇　百錬抄』（吉川弘文館、一九二九年）。延長七年（九二九）十月十四日条「第八内親王為兵部卿親王設冊賀禮」。

4 『後撰集』慶賀・一三六八
女八のみこ元良のみこのために四十賀し侍けるに、きくの花をかざしにをりて

5 『貫之集』
延喜十年十月十四日女八宮、やうぜい院の一のみこの四十賀つかうまつる時の屏風てうぜさせ給ふ、仰にてつかうまつる

6 片桐洋一・関西私家集研究会『和歌文学注釈叢書Ⅰ　元良親王集全注釈』（新典社、二〇〇六年）。

7 木船重昭『元良親王集注釈』（大学堂書店、一九八四年）。

8 注6九二頁。

9 民部大輔だった父の相輔王に因んだ呼び方。相輔王皇統不詳。

10 山口博「元良親王集の物語性」（『平安文学研究』第二十五輯、一九六〇年十一月）をはじめ、『元良親王集』冒頭詞書の
陽成院の一宮元良の皇子、いみじき色好みにおはしましければ、世にある女の、よしと聞こゆるには、逢ふにも、逢はぬにも、文遣り、歌詠みつつ遣り給ふ。
と対応するという。

11 片桐洋一ほか『新編日本古典文学全集12　竹取物語・伊勢物語・大和物

語・平中物語』（小学館、一九九四年）。以下同じ。

12 『系図纂要』によれば、醍醐天皇第七皇女婉子内親王の生年は延喜四年（九〇四）。『一代要記』の醍醐天皇第九皇女敏子内親王条に「延喜十一年十一月八日為内親王年六歳」とあるように、醍醐天皇第九皇女敏子内親王の生年は延喜六年（九〇六）。

13 『平安時代史事典 CD-ROM 版』（角川学芸出版、二〇〇六年）。

14 東京大学史料編纂所『大日本古記録　貞信公記』（岩波書店、一九五六年）。

15 元良親王寛平二年（八九〇）生、天慶六年（九四三）七月二十六日薨。

16 注6九五頁。

17 元良親王が兵部卿になった記録は注3所掲の『日本紀略』の記事が初見である。同じ時期に関する史料から呼称の変化が見られる。兵部卿以外の官職の記録なし。

『吏部王記』延長七年正月条「十四日、遅参、不預行香、公卿在宮幕所、余欲著座、大外記久永云、早参内裏為善、陽成院一親王後参著幕座、諸人為不快云々、仍参殿上也」。

『西宮記』巻四（神今食）「延長七年十二月十一日例、仍差内竪、召兵部卿元良親王、還参云、只今可参云々、元良親王、参議忠文着座云々、待暁の間、令侍従囲碁云々」。

18 『新訂増補国史大系　第五十三巻　公卿補任　第一篇』（吉川弘文館、一九三八年）。以下同じ。

19 『増訂故実叢書第十一回　拾芥抄　禁秘抄考註』（吉川弘文館、一九二八年）。

20 『公卿補任』による。

21 阿部秋生ほか『新編日本古典文学全集24　源氏物語⑤』（小学館、一九九七年）。

22 注11一五九～一六〇頁頭注。

23 注11に同じ。

24 『新訂増補国史大系　第二十二巻　律　令義解』（吉川弘文館、一九二九年）。

25 中村みどり「藤原師輔と内親王降嫁の実現」（『古代文化』69（4）、古代学協会、二〇一八年三月）。

26 『日本紀略』延喜十七年条「四月廿九日、丁未、陽成院第三無品元長、第四元利両親王加元服、初参内裏」。

27 『日本紀略』承平三年条「二月五日、辛亥、無品脩子内親王薨、先帝第八皇女」

28 注7六一頁。

29 『系図纂要』による。

―こ・うごう、広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期在学―